

2001年(平成13年)12月20日

アイヌタイムズ第19号日本語版

★ イケマ

イケマは臭いがきついものなので、悪い神(ウエンカムイ)も流行病(パコロカムイ)もいやがるといいます。イケマをかんで病人に吹きかけたり、家で吹いたり、首から下げたりしました。

知里 真志保さんはこのように言いました:「イケマは『カムイ ケマ(神・足)』だろうと私は思う。草の根は『ケマ(足)』と表わされることもある。」

イケマはシンリツとか、ペヌプという地域もあります。その根を切ると乳(のような汁)が出るので、ペヌプとも言われています。[註:ペヌプ pe-nu-p 汁・多い・もの という語源らしい]

川上 まつ子はこのように言いました:「うちのおっかあたち風邪でもひいた時なもんだか、イケマを刻んで家の中吹いたりしたのを見たことがある。わしら小さかった頃は、ポンプクル(ポンプクル小袋)さ、おっかあ、スルククスリ(スルククスリ ショウブ)とかイケマとか入れて、首から下げられてくれたもんで、15、6頃まで、それ首に下げたもんであったよ。イケマやスルククスリは、ハコオロアオマレ(棺桶に入れる)したら、アナンシリ(死者)持っていくポンプクルだの入れてしまった。」

イケマは焼いたり、煮たりして、これを食べましたが、親指くらいものを2つも食べると中毒(イヨシキ)を起こしたので、警戒したと言われています。大きいものは、5cmほどに太くなり、50cmくらい長くなります。

青木 愛子さんはこのように言いました:「老婆がイケマの根塊を黒く焼いてかじっているのを見たことがあります。老人は長生きのための薬だ(これを薬として食べるといつまでも私は元気だ)と言っていました。」

萱野 茂のアイヌ語辞典には、こう書かれています:「イケマを焼いて食べる時、あまり多く食べるとそれによって酔っぱらったようになり、ふらふらして、時にはそれで死ぬこともあるそうだ。」

この毒の元は、シナンコトキシシというものだそうです。これは、強心・利尿作用のあるものと言われています(飲むと、そのおかげで心臓がよくなるものだと思います。また、そのおかげでちゃんとおしっこできるものだと思います)。

イケマは「*Cynanchum caudatum*」という学名です。「*Cynanchum*」の意味は「犬を殺すもの」です。日本ではイケマ(カモメヅル属ガガイモ科)と言う名です。

イケマは南千島、アイヌモシリ(北海道)、日本、中国に生えるものです。山地に生え、つるになります。7、8月に花が咲き、8、9に実がなります。

「知里 真志保 分類アイヌ語辞典」には、こう書かれています:イケマは、腹痛の時に、少量噛んで飲みました。頭痛の時は、焼いて布に包んで、鉢巻きにしました。眼病には、寝る前に噛んで、まぶたにつけました。濃く煎じて(煎じて煮汁が濃くなると)傷を洗うと化膿しませんでした。虫歯の痛みにも、これを噛みました。

美幌では種につく綿で傷薬にしました(種の表面に付いている綿を取って、どこか傷ついたところに薬として使いました)。

日本では、イケマの乾燥した根は、牛皮消根(ごひしょうこん)と呼ばれ、アイヌの人たちと同じように薬にするのです。イケマの中には、プレグナン配糖体のキナンコサイドC2というものがあります。これは、抗腫瘍性も、免疫増強作用もあるという人もいます。

[横山 裕之] 沙流・千歳